

第6学年 社会科 学習指導案

1. 小単元名『戦争と人々の暮らし』

(教科書：『小学社会 6 上』 p. 118～132／学習指導要領：内容（1）ケ）

2. 小単元の目標

- ・ 15 年戦争当時の人々の暮らしについて、地域に残る資料や体験者の話に関心をもって調べたり聞いたりする。
- ・ 地域における戦争の記憶や記録を調べることを通して、日本が戦時体制に移行し、国民生活が変化していったことを、学校生活を中心に自分自身の生活と比較しながら考えることができる。
- ・ 戦後の学校生活を中心とした国民生活の変化を調べることで、戦後の日本が民主的な国家として再出発したことがわかる。
- ・ 15 年戦争で人々が受けた被害や、終戦後に日本が平和な社会を目標としたことについて調べたことをもとに、戦争と平和について自分なりの考えをもち、それを発信することができる。

3. 小単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
15 年戦争当時の地域の人々の生活について関心をもって聞いたり調べたりする。	戦時中や戦後の人々の生活について自分自身と関連づけて考え、戦争と平和についての自分の考えを明らかにする。	地域に残る資料や外部講師の話から、自分の暮らす地域での戦時中の様子を読み取ることができる。	戦時中から戦後までの人々の生活の変化を調べ、戦後の日本が民主的な国家として再出発したことがわかる。

4. 指導にあたって

(1) 児童の実態

前小単元「近代国家に向けて」において、校区内にある慰霊碑を訪ねたり、郷土誌を用いて日清・日露戦争の戦没者を調べたりした。特に、慰霊碑からは、日露戦争における戦没者の慰霊であることを碑の側面の文章を調べることで知り、自分たちの住む地域も戦争と関係があったことに驚いた様子が見られた。このように、地域素材に触れることで歴史的事象に興味をもち、意欲的に調べたり考えたりする児童が多くいる。しかし一方で、単元のまとめをするときには、歴史的事象について表面的な理解に留まっている児童の姿も見られる。教科書の記述のみを追いかけて、地域で体験したことと学習内容が十分に結びついていない様子も見られている。

そこで、自分の今の生活と戦時中の地域の生活を比較しながら、より身近に歴史的事象を捉え、自分と関わりのある事柄として戦争や平和について捉えさせるために、地域の人から学校生活を中心とした戦時中の話を直接聞く時間を設ける。児童にとって身近な学校生活に焦点を当てることで、自分自身の生活体験と関連づけたり比較したりすることができるようにする。

また、地域から日本全体へと児童の意識を広げるために、多様な地域（疎開を含む）での戦時中の生活経験を外部講師から話してもらう。地域からの視点を大切にしつつも、日本全体を見渡す視点も同時にもたせることで、歴史的事象の理解を深めさせたい。

これらの手立てにより、これまで表面的な歴史的事象の理解に留まっていた児童が、戦争をより多面的な視点から考えることができるようにし、戦争と平和について自分なりの考えがもてることを目指す。

（２）教材について

本校区には、２か所の神社に太平洋戦争の忠魂碑が建立されており、計 50 名ほどの戦没者を吊っている。地域に残るこの二つの忠魂碑は、戦没者や戦争そのものに対する地域の人々の強い思いを示している。その他にも、郷土誌から地域の戦没者について知ることができる。また、実際にこの地域で行われた戦争訓練の経験などを、疎開してきたお年寄りから話を聞くことも可能である。

さらに、本校の歴史からも 15 年戦争に迫ることができる。本校高等部卒業後に満蒙開拓青少年義勇軍として渡満した人物がおり、その人物について語ることができる地域の方がいる。また、当時の校歌の 2 番が、戦後の民主化の中で職員会議を経て歌われなくなったという経緯がある。これらのことをふまえると、本小単元は地域教材の活用に適した単元であるといえる。

また、それと同時に日本全体を見渡す視点からの資料も準備し、日本が国家をあげて戦争に突き進んでいったこと、国民全体が戦争に巻き込まれていったことも理解できるようにする。その上で、地域に視点を落とし、戦争の生々しい記憶と記録を児童にぶつけていく。地域を通して歴史を知り、当時の人々の実感に迫ることで、児童が戦争に関わった人々の立場からも歴史について理解し、これからの自分自身の生活と関連づけて考えることができるようにしたい。

（３）指導上の工夫・留意点

地域教材に触れたり、地域に住む人の体験を聞いたりすることで、15 年戦争をこの地域やこの地域に住む自分自身と関連づけたり比較したりしながら捉え、戦争や平和について自分なりの考えを発信できる児童の姿を期待している。

外部講師を含む地域教材の活用方法を見直し、児童が戦争に巻き込まれた人々の立場から歴史を理解することができるようにしていく。まず、導入で地域素材を活用し、児童が興味・関心をもって学習活動に入れるようにする。例えば、忠魂碑を訪ねたり地域の資料を読み解いたりする学習が考えられる。また、自分自身の家系の中にある戦争の記憶を聞き取る活動（祖父母、曾祖父母から）も戦争について学ぶ意欲を増したり、理解を深めたりするのに有効であると考えられる。

そこで、以下の点に留意して指導を行う。

- ・児童にとって自分の生活と比較できるように、学校生活に焦点を当て、戦時中～終戦～戦後と生活の変化について考察したり話を聞いたりすることで、戦争や平和について自分自身の考えをまとめられるようにする。
- ・戦争について、日本全体を見渡す視点で調べたり考えたりすると同時に、地域というより近い視座で捉え直すことで、「自分たちの地域でも実際に起きたこと」として感じることができるようになる。

- ・可能な限り，地域素材を資料として用いることで，児童が興味・関心をもって戦争について学習できるようにする。
- ・資料から歴史的事象を調べたり考えたりする活動の後に，実体験を外部講師から聞く活動を設定することで，戦争が国民生活に与えた影響や戦後の民主化に伴って変化していく生活の様子について，理解を深められるようにする。
- ・戦争を体験した人の平和を願う思いや，忠魂碑に込められた地域の人々の思いを感じることで，戦争と平和について，未来に生きる自分自身の課題として捉えられるようにする。
- ・学習の終着点として，戦争を体験した外部講師の方に向けて，戦争や平和についての自分の考えを発信していくことを，子どもたちが意識しながら学習を進められるようにする。

5. 小単元の指導計画（総時数 12 時間）

次	時	○学習活動	・児童の思考や疑問	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
1 忠魂碑で知る戦争	① ② (つかむ)	○事前にとったアンケートをもとに，15年戦争について知っていることを紹介し合い，もっと調べたいことを考える。 ○地域の神社にある忠魂碑を調べ，自分たちの地域も15年戦争と関わりがあったことを知る。	・忠魂碑に名前がある人は，どのような戦争に巻き込まれ，命を落としたのだろう。 ・自分と同じ姓がある。 ・神社に名前があるのは，この地域の住人だからだ。 ・生き残った人が忠魂碑を作ったと思う。 ・生き残った人に話を聞きたい。	◎児童にとったアンケート ◎忠魂碑 ◇忠魂碑の碑文から「日支事変」という言葉を抜き出し，日本と中国の間での戦争だったことに気づかせる。 ◆忠魂碑を調べ，自分たちの地区に多い姓の人が亡くなっていることに気づく。 (思・判・表／ノート・発言)
2 戦争の広がり	③ (調べる)	○中国との戦争が始まった経緯を知る。 ○日本と満州の関わりを調べ，多くの人が満州に渡った理由を考える。	・日清戦争と関係があるのだろうか。 ・満州はロシアと戦争をして手に入れたから，大切にしているのではないか。 ・どんな人たちが満州に渡ったのだろう。	◇地名や用語を確実に理解させ，学習でのつまずきと意欲の低下を防ぐ。 ◎写真・地図資料（中国・満州） ◎学校沿革誌（満蒙開拓義勇軍） ◇学校沿革誌の記述を活用し，地域の人々も満州開拓にかかわっていたことに気づかせる。 ◆日本と中国の戦争が始まった理由がわかる。 (知・理／ノート・テスト)

	④ (調べる)	○戦争がアジア・太平洋地域に拡大していった経緯を調べる。	・アメリカと戦争するほど日本は力があつたのだろうか。 ・どうして日本はアジアに軍隊を送つたのだろう。 ・日本の軍隊はどこでどのように戦つたのだろう。	◎地図資料（支配領域がわかるもの） ◎戦時中の石油輸入量のグラフ ◎自分たちの地域の戦没者名簿 ◇戦没者名簿を活用する際には、個人名は伏せ、<u>戦没地に</u>着目させる。 ◆資料から、戦争がアジア諸国に広がったことを読み取る。 (思・判・表／ノート)
3 上関地区と十五年戦争	⑤ (調べる・深める)	○学校や地域の戦時中の様子を外部講師から聞く。	・この地域の子どもたちも戦争に巻き込まれていたことがわかった。 ・子どもたちはどんな気持ちだったのだろう。 ・教えていた先生たちはどんな気持ちだったのだろう。 ・この学校でも、戦争のための教育をしていた。 ・この学校からも満州に渡った人がいた。 ・この地域の子どもたちも、戦争のための勉強をしていた。	◎H 講師の体験談 …終戦当時 16 歳（陸軍士官学校在籍）。本校高等部卒業生。小学生の時、軍事教練の経験がある。満蒙開拓青少年義勇軍を小学校から見送った経験がある。 ◇当時の学校生活を中心に話してもらい、児童が自分の学校生活と比較して戦時中の生活を捉えられるようにする。 ◆当時の学校生活を自分の今の学校生活と比べながら聞き、自分なりの考えをもつ。 (思・判・表／ノート)
	⑥ (調べる・広げる)	○資料をもとに、戦時中の人々の暮らしの様子を調べる。	・戦争がもとになった遊びがある。 ・食べ物は少なくなって、配給になった。 ・国全体が貧しくなったんだ。 ・国民全体が戦争中心の生活になった。 ・働く人が兵隊に行ってしまうて困った。	◎軍人将棋など戦時中の遊び道具 ◇道具のおもしろさだけに児童の関心が向かないように、戦争と関連した部分に着目させて調べさせる。 ◎軍国教育の資料（時間割など） ◎郷土誌（隣組について） ◎召集令状 ◎学校沿革誌（実弾訓練の記述） ◆日本が戦時体制へと移行したことがわかる。 (知・理／テスト)

4 空襲の恐怖と疎開	⑦ (調べる)	○空襲について調べ、戦争が激しくなるとともに、国民が受けた被害が大きくなったことを知る。	・空襲を受けた町はどうなったのだろう。 ・どれくらいの人が犠牲になったのだろう。 ・新潟でも空襲はあったのだろうか。 ・空襲から逃れて疎開した子どもがいた。	◎空襲の様子の写真 ◎空襲時にまかれたビラ ◎映像（『昭和 20 年 8 月 1 日～語り継ぐ長岡空襲～』NST 製作） ◇語り部の談話を含む長岡空襲についての映像を見せることで、空襲の悲惨さを実感をもって理解させる。 ◆空襲の様子と国民が受けた被害の大きさがわかる。 (知・理／ノート)
	⑧ (調べる・深める)	○外部講師から疎開の経験や戦争が激しくなっていたときの様子を聞く。 ○自分たちで調べた戦時中の生活について、外部講師に質問し、実際に起きた出来事であることを確認する。	○疎開してきた人がいたということは、この辺りは空襲などはなかったのだろうか。 ○H 先生と同じ経験をしているが、小さい子どもにとって戦時中の生活は大変だったのではないか。 ○上関地区にも疎開してきた人がたくさんいた。	◎ O 講師の体験談 …終戦時、本校へ疎開（8 歳）。上関地区で戦時中過ごした経験がある。 ◇これまでに調べた戦時中の生活の様子について、外部講師の話から再確認し、理解を深められるようにする。 ◇終戦時の様子についても簡単に触れてもらい、以後の調査・考察への意欲をもたせる。 ◆これまでに調べたことをもとに、講師と積極的に話し合っている。 (関・意・態／発言) ◆外部講師の話から戦争を実際に起きた出来事として実感的に捉え、自分の考えをもっている。 (思・判・表／ノート)

5 日本の敗戦	⑨ (調べる)	○敗戦に至った理由を資料から考える。	・学生まで兵隊になっていたのだから、兵が足りなくなっていたにちがいない。 ・原子爆弾が落とされたからだ。 ・戦争が終わってほっとした人もいたのではないか。 ・日本に支配されていた国はどうなったのだろう。	◎昭和天皇玉音放送（音声） ◎戦没者の手紙 ◇戦没者の手紙などの資料を活用し，戦争に対する当時の人々の思いに迫れるようにする。 ◇日本に支配されていた国が解放されたことにも触れる。 ◆資料をもとに，戦争に対して当時の人々がどのように感じていたか考えている。 （思・判・表／発言・ノート）
6 日本の再出発と上関の教育・暮らしと平和な社会へ	⑩ (調べる・広げる)	○終戦後の日本がどのような国を目ざして再出発したか，資料から考える。 ○民主化の過程について調べ，小学校校歌の2番が歌われなくなったことと民主化に関連がないか考える。	・戦争に負けたけど，子どもが笑っているのはどうしてだろう。 ・教科書に墨が塗ってあるのは，何を隠しているのだろう。 ・戦争のための勉強をやめたのではないか。 ・日本は平和な国を目ざしたのだと思う。 ・これからは他の国と戦争をしないように決めたと思う。 ・校歌の2番も「戦争」に関する言葉が使われていたから，歌われなくなったのではないだろうか。	◎終戦直後の様子を表した写真資料 ◎墨塗り教科書 ◇敗戦時の様子から，戦後の日本が向かう方向を予想させる。 ◇次時に，調べたことを〇講師に発表して，実際の様子を聞くことを確認する。 ◇戦時中の国民生活と比較できる資料を用いる。（配給－給食，軍事教練－戦後の授業風景など） ◆日本が平和な国を目ざして再出発したことがわかる。 （知・理／テスト）

⑪ (深める) 【本時】	○戦後の日本の変化について、自分たちの考察を外部講師に発信し、外部講師から実体験を聞くことで、日本の民主化の過程について理解を深める。 ○小学校の校歌の2番が職員会議を経て歌われなくなったことを外部講師の話から知る。	・学校生活では、戦争のための勉強をしなくなった。 ・戦時中の勉強をやめるために教科書に墨を塗って使っていた。 ・校歌の2番も戦争の勉強をやめたことと関係があったのか。 ・小学校でも民主主義の勉強が始まったのだと思う。	◎ ○ 講師の体験談（再度話を聞く） ◇自分たちが調べたことと実際の話と比較して確認し、理解を深める。 ◇墨塗り体験を聞くことで、より実感に即した歴史理解ができるようにする。 ◇平和の尊さについての話を聞き、忠魂碑に込められた地域の人の思いにも気づかせるようにする。 ◆平和な社会を築くことの大切さを自分のこととして考えている。 (思・判・表／ノート)
⑫ (まとめる)	○平和について作文にまとめ、自分の考えを発表する。 ○お世話になった講師の先生を招いて、戦争・平和についての思いを発表する。	・忠魂碑に込められた地域の人々の思い ・地域の中の戦争の記憶を追体験して、平和について考えたこと ・戦争体験をもつ人に伝えるという目的のもと、平和について自分の行動や将来と関連づけながら考えたこと	◇これからの自分のことや地域のことと関連づけて、平和についての考えを発表できるようにする。 ◆戦争について自分自身にも関わりがあることと捉え、自分の思いを文章に表している。 (思・判・表／作文) ◆未来をつくる一員として、平和について自分の意見を述べようとしている。 (関・意・態／発言)

6. 本時の指導（第11時）

（1）本時のねらい

- ・民主化する世の中で変わっていく学校生活を通して、当時の子どもたちの気持ちを考えることで、平和な社会を築くことの大切さについて自分の考えをもち、それを文章に表す。
- ・平和な社会をつくる一員としての立場から、平和について自分なりの考えをもつ。

（2）本時のねらいに迫るための手立て

- ・児童にとって身近な教材（校歌）から学習を始めることで、当時の子どもたちの気持ちを想像しやすくする。

- ・学校の民主化について考えたことをもとに話し合い、さらにその話し合いの結果をもとにして外部講師の体験を聞くことで、平和や民主主義について、自分なりの考えをもてるようにする。
- ・児童のふり返りを話し合いの転換点として活用し、児童の思考の流れに沿って平和や民主化について考えられるようにする。
- ・平和の尊さについて戦争を体験した立場の方から話してもらうことで、平和を求める人々の思いに気づけるようにする。

(3) 本時の展開

時配	○学習活動 T: 発問 C: 児童の反応	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
8	○前時に立てた予想が合っているか、講師に質問する。 T1: 日本が平和な国を目ざして再出発したことがわかる話を聞いて、平和について考えましょう。 T2: まず前回予想したことをO先生に聞いてもらいましょう。 C1: 小学校の校歌の2番には、戦争に関係がある言葉があったのではないですか？ C2: 先生たちで話し合って、歌わないようにしたのではないですか？ 講師(以下、GT) 1: よく考えましたね。その通りです。校歌の中の言葉で、民主主義にふさわしくないと当時の先生が考えたものがありました。(問題となった歌詞の部分について、具体的に解説してもらう。)	◎歌われなくなった校歌の2番 ◎前時に児童が書いた予想 ◇前時に立てた予想から導入し、本時の課題につなげていく。 ◎講師の話
25	○本時の学習内容を知り、課題を確認する。 T3: 校歌を歌わなくなったのと似たような出来事が他にもありませんでしたか？ C3: 教科書に墨を塗った。 T4: 今まで歌っていた校歌を歌わなくなったり、今まで使っていた教科書に墨を塗ったりして、子どもたちはどんな気持ちだったかな？ 学校生活が変わったことで子どもたちはどんな気持ちになったのだろう？ ○民主化が始まった当時の子どもたちの気持ちについて考える。 C4: 平和になってよかった。 C5: 今まで教えられてきたことはなんだったのか。 C6: 大人の都合でころころ変えられても困るよ。 T5: なるほど、この間までは「戦争に協力」、今日から	◆学校生活が民主的に変化したことについて、自分の意見を言おうとしている。 (関・意・態／発言) ◇児童一人一人が課題に向き合えるように、自分の考えを書く時間を設ける。

	は「戦争に反対」だもんね。今までのことは一体何なのでしょう？ C7：うそを教えられてきたのかな。 C8：強制的に戦争に行くように教えられていたんだ。 T6：そういえば、前に授業に来てもらった H 先生に教えてもらいましたね。『国全体が、同じことを教えるように決められていた』んですよ。 T7：K さんがそのときの感想で書いていることに、少しヒントがあるんじゃないかと思うんですけど、紹介してくれないかな？ C9：「67 年間ずっと憲法を守っていてすごい。それほど戦争したことを反省しているのかなあ。」 T8：憲法を守るということは、つまり戦争はどうするのか？ C10：戦争はしない。 T9：じゃあ、学校のことに戻ってみると、子どもたちは、学校が変わっていったことをどう受け止めたと思う？ C11：もう戦争はしないように平和の勉強をしたい。 C12：戦争のためじゃなくて平和のために勉強したい。	◇以前に児童が書いたふり返りを引用することで、戦争に反対する気持ちや、平和を求める気持ちに迫れるようにする。
8	○外部講師の話を聞き、民主的な社会になったことや、平和を願う人がたくさんいたことに気づく。 T10：O 先生、子どもたちは、こんなふうに考えました。先生は、当時のことをどんなふうに受け止めたのですか？ GT2：(墨塗りの体験や平和についての話) T11：地域の人々も、きっと平和を願っていたのだと思います。この勉強を始めるときに見に行ったものを覚えていませんか？ C13：戦争で亡くなった人の碑を見に行った。 C14：もう戦争が起こらないように願って作ったんだ。	◇平和を求めた人々の体験と意見を聞くことで、平和の大切さに気づけるようにする。 ◎忠魂碑の写真 ◇忠魂碑について思い出させることで、地域の人々も平和を求めていることに気づけるようにする。
4	○平和な社会を目指した日本について、考えをまとめる。 T12：今日の学習のふり返りをしましょう。今日は「終戦後 67 年目からの平和について、自分はどうか考えるか」について書きましょう。	◆平和な社会を築くことの大切さを自分のこととして考えている。 (思・判・表／ノート)

7. 備考

「①児童の思考の流れを想定して地域教材を配置し、その認識を大切にしながら補助的資料を提示すること」「②児童の心情を揺さぶるような人と繰り返し出会わせること」を手立てとして実践を行

った。

- ① 忠魂碑，H 講師，語り部（映像），O 講師①，O 講師②と配置した地域教材が児童の認識を深めた。地域での戦争体験，映像資料，小学生の目を通して見た戦争と平和，校歌と，地域教材を提示し続けることで，戦争や平和について自分と関連づけて考えるようになった。児童の中から「戦争の勝ち負け」という価値が消え，当時の人々の気持ちを思うような変容が見られた。
- ② H 講師への聞き取りは，この地域と戦争の関わりを児童に強く意識づける意図で行った。また，O 講師から 2 度にわたって話を聞いた意図は，戦時中の生活と戦後の生活を同一人物から当時の小学生の視点で語ってもらうためである。

単元導入時の児童の認識は「戦争の勝ち負け」や「強さ（戦力）」にこだわったものがほとんどであった。学習を終えて，H 講師に向けて書いた作文では，戦争や平和について自分と関連づけながら捉えており，主体的に 15 年戦争という歴史的事象に関わった様子がうかがえる。